

# たぐみ

## Craftsmanship

特集1 出雲出西窯展  
 特集2 広幅の藍緋「弘布」

第5号

### 夏の風物詩と

### 熟練の手技

六月ともなると、さすがに街に扇子を使う人の姿を多く見かける。夏の風物詩といえほかに團扇、風鈴、金魚鉢、かき氷、すだれ、縁台、それに浴衣となる。

今では下町でも、このような風物をまとめて見ることは、まずない。しかし私の知る限りでも、隅田川や江の島の花火大会は、江戸の錦絵の一場面を彷彿させる。なによりも若い女性の浴衣姿が佳い。

ところで昔から親しまれた夏の風物は、庶民のものだからすべて量産品である。うちわも東西の大産地、房州館山や四国の丸亀では年間数千万本が作られたという。

そのふたつの産地で竹の骨作りや紙貼りなどの作業を見たことがあるが、その熟練の仕事の早さ、確かさには舌

を巻くばかりであった。そしてなにより段取りの良さと流れ作業の無駄のなさが美事である。娘時代、母親から教わって身体で覚えた世襲の手技であるが、それが今はもう少い。

北九州の金魚鉢も、三十年ほど前までは鉄道貨車で大量に出荷したという。手吹き硝子の工場で、三人一組でアツという間に吹いたガラスが金魚鉢の形となる。炉の火を止めたり弱めると、次の作業をするのに時間の無駄があるので、作業はほとんど止むことがない。

それが今では注文がわずかだから、仕事にもかつての勢いが無い。それでも今なおつづく職人の手の技は、私たちの心に残るのである。

夏や正月の風物詩を彩どるさまざまな品が、近年中国や東南アジアで大量に作られ輸入されている。そして風土に根づいた庶民の手技が忘れ去られる。日本の生活文化の根原をあらためて問いたい思いがしきりである。

(志賀直邦)



出西窯の作品展示棟（左）と作業棟

たくみ企画展

## 出雲 出西窯展

会期 六月二十八日（土）～七月六日（土）  
会場 たくみ二階ギャラリー

六月二十九日（日）、七月六日（日）は営業いたしません。

### 出西窯の新しい門出

出西と書いて「しゅつさい」とよむ。その窯は八岐の大蛇伝説で知られる斐伊川のほとり、斐川町出西の地にある。そこは出雲地方特有の海風を防ぐ美しい築地松の点在するのどかな田園で、その山裾にいくつかの作業棟に囲まれて登り窯がある。傍らには水簸場がある。この地の粘土を漉しての陶土作りがなされている。

このような窯の姿は、日本各地に今なお残る伝統の地方民窯の風景となんら変りはない。がひとつ異なるのは、出西窯がやきものの伝統のまったくな

い農村に、戦後間もない昭和二十二年に産ぶ声をあげた新しい窯であること、それも農家の次、三男であつた幼な友達五人による協働の仕事として発足したということである。

出西窯の仕事について語る際に、まづ触れなければならないのは、創業間もない頃からの、民藝運動の先駆者たちとの結縁である。同人の一人多々納弘光のちに国立近代美術館ニユースに記した文によれば、「有名高価鑑賞の藝術品こそ思っていた私どもにとつて」、松江の工藝家金津滋から教示された柳宗悦の民藝美の思想「無名職人、無銘の実用雑器に宿る美という教えは驚きでした」という。

その後彼らは河井寛次郎を京都に訪ね、そして二十五年八月、河井を出西に迎える。出雲今市の駅から窯へ向う途中、ハイヤーの車中から河井は小さな店先にならぶ一群の黒い瓦器を見つけて車を降り、喜びの声とともにその一



饅頭蒸し器 (大) 16,000 円 (小) 12,000 円



深皿 5 寸 1,650 円 胴紐黒碗 (小) 1,650 円



はたぞり切立鉢 7 寸 5,500 円

つを手にとったという。それはイカ釣りの漁師たちが使う火鉢で、水をかぶっても消えない実用の機能に富み、形から釣鐘火鉢とよばれていた。

河井はその夜、出雲の風土と暮し、実用一筋の仕事に宿る美の攝理を説いた。そして五人の青年たちから迷いは消え「用の器一途の外に道はないと心

が決まった」のであった。

その後彼らは山陰における新作民藝の指導者吉田璋也の主宰する民藝協団に参加し、柳宗悦を中心とする民藝運動の集団のなかで多くの教えを受けつつ作陶に励んできた。

だが直接に受けつぐべき伝統をもたない青年陶工たちにとって、新しい実

用陶器創作への道はまさに試行そのものであったことであろう。彼らはその作陶の道しるべとして、日本民藝館展、日本陶藝展などの公募展への出品の道を選び、識者の目にゆだねることによって、自らの灯台としたのである。

だが出西窯にとつての何よりの恵みは、バーナード・リーチの来訪と指導



花器 5,500円



外鉄丸深鉢 7寸 5,500円 6寸 4,100円



石鹼入れ 2,700円 鎚蓋物 4,100円

であった。この窯の洋食器の把手作りはリーチ直伝だが、数ある地方民窯のなかで出西の器がもっともアカ抜けし、てみえるのもうなづけよう。

このように出西の陶工たちは、良き師に恵まれ、多くの親しい友、愛好家を得て今日にいたった。そして時の推移とともに新しい仲間がふえ、二代目

たちも加わるようになって、出西窯の仕事の協働的性格はよりいっそう増していったのではないだろうか。

そして昨年、創業時の人たちが第一線を退き、若い世代がすべてを担うようになって、出西窯はまた新しい門出を迎えた。すでに出雲の出西の地で、五十六年のやきもの作りの経験は、良

き風土にも恵まれて、誰もが認める用の美をそなえた特色を生み出した。これをこのあと、どのように発展させていくか、陶工たちの精進とともにわれわれ愛好家たちの、ふだんに使うことによつて作り手を励まし、育てるという責任もあるように思う。

(志賀直邦)



境野さんの緋のクッション 1点 7,650円

## 伊藤さん、境野さん、 久留米、協力の手仕事

毎年秋に行われる日本民藝館展の染織部門に、沢山の着尺や帯地が出品されます。絹の紬や綿唐棧、あるいは型染、捺染、絞染などさまざまですが、うかがってみると皆さんほとんど着物を着ることがないということです。

それではなんで小幅の作品を作るかというと、公募展で入選するには小幅の作品が一番、ということのようです。そういったなかで、いま広幅の作品

づくりに取り組んでいる方がいます。

伊藤弘子さんと境野満さんのお二人ですが、秀れた感性をもったデザイナーと、織物の総合的なエキスパートの絶妙な協力関係が、良い作品を生む何よりの条件だということが解ります。

伊藤さんは久留米緋の藍と白の美しさに魅せられ、小幅の着物柄をデザインすることからはじめられました。その後の広幅への転換やプロデュースの苦勞と経緯については伊藤さんの別稿に詳しくのべられています。

境野満さんは群馬県伊勢崎で代々織物を家業とされてきました。伊勢崎はもともと銘仙など織物の産地として知られたところでした。満さんの父三次さんは、しかし現状にあき足らず、早

生の指導なども受け、小幅、広幅にこだわらず手織りの仕事を続けてこられました。その実際の仕事に当たったのは息子の満さんでした。

境野さんの強みは何よりも、緋糸を染めるための糸括りも自分ですということ。糸の括りには力が要り、熟練の手技が欠かせません。

伊藤さんの、なかなか難しいデザインを白糸に括り、藍染は久留米の紺屋に託し、それをほどこいて織り上げるという仕事は、当事者間の余程の信頼関係がないと出来ないことです。その気持ちのつながりが、あの美しさを生むのだと思います。

境野さんは、ご自身の柄で九十二センチ幅の広幅布も織られています、糸の番手が太いため丈夫でインテリア布として好評です。本藍ではありませんがその分安価で、クッションなどに広く用いられています。

(S)

## 広幅の藍緋「弘布」ひろふ

伊藤弘子

世界にはさまざまな美しい緋があり

ますが、藍と白の日本の緋は大変ユニークです。かつてわが国のどこにでも見られた庶民の緋は、和服の衰退と共に姿を消し、日常生活から忘れ去られ

ようとしています。

パリやニューヨークで、つい最近まで三宅一生が、そして今も、川久保玲や山本耀司が活躍しているのにひきかえ、世界に誇れる日本の伝統織物が衰

退の一途をたどっている現状は非常に淋しいことです。

藍染・手織りの日本伝統のたて・よこ緋のモダンさと確かさを広く多勢おおぜいの方に知っていただき、再び生活の表舞おもてまい台に登場させたく、伊勢崎の境野満氏に七十五センチもの広幅を手織りしていただき、「弘布ひろふ」と名付けた直線裁ちの衣を創りつけています。

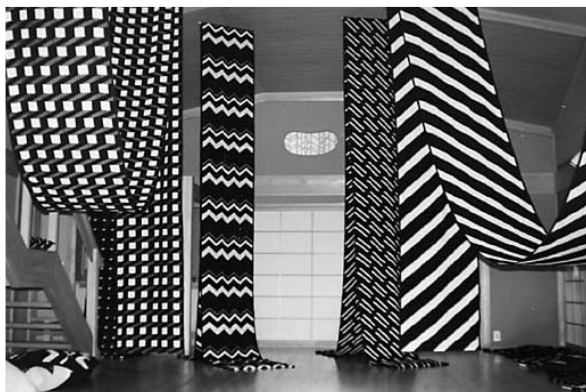
直線裁ちの衣は、ゆつたりとフリーサイズ、流行に左右されず、年齢、性別を問わず、季節も問わずに着ることができます。カジュアルにも、ちよつとフォーマルにもオールラウンドに着こなせます。「弘布」は明日への自然で自由な生活の提案です。

十七年前、ふとしたきっかけから鮎店のユニフォームのために久留米緋をデザインし、着る店員にもお客にも好評でした。得意になって、この緋をたくみの志賀さんにお見せしましたとこ



弘布を使った直線裁ちの衣





弘布の個展会場の展示風景  
東京中野山田屋ギャラリー「シルクラブ」

ろ、「きれいな緋ですね。でも最近はお綿の反物はほとんど売れないんですよ。これが広幅ならすてきですね」とおっしゃいました。

「小幅を広幅にする」一見簡単そうに思えたそのことは、実はたいへんなことでした。久留米に何度か行き、久

留米からも来ていただき、ようやく実現かと思った矢先、ちよつとした気持ちの行き違いですべて振り出しに戻ってしまいました。

幸いにも、山村健氏と出会い理解していただけました。それから、六十五センチのモダンで美しい緋がつぎつ

ぎとでき、その直線裁ちの衣は、個展の度に好評で、「染織α」や「家庭画報」その他にも紹介され、そろそろ軌道に乗ったかに見えた時、突然職人の病気のため作品が出来なくなりました。

久留米で作品を創り始めて、七年の歳月が過ぎていました。この時は本当にがっかりいたしました。が、又しても志賀さんに助けて頂くことになりました。伊勢崎の境野満氏にご紹介いただき、お願いするようになって現在八年になります。

初雪、淡雪、さざなみ、大波、大玉、木もれ日、横段、ジグザグ等、今の生活空間に調和するよう工夫した幾何学文様の緋「弘布」は、すでに三十種類をこえました。美事に蘇ったかに見えますがどのように未来へつなげるのか、何も解決はしていません。その幸せな着地点は、はるか彼方のようにでもあり、案外すぐ近くなのかもしれない。



型染うちわ 2,300 円(左)、麻布張り 3,000 円(右)



腰張りうちわ 1,800 円(左)、小丸うちわ 900 円(右)

## をくみ歳時記

### 丸柄のうちわ

うちわは昔から夏の涼風を誘うもの、初夏の夕暮れにはとくに手元に欲しいものです。

たくみのうちわは芹沢銈介の型染め和紙を用いた品と、日の出風の腰張りうちわが特色でした。芹沢先生亡きあとはお弟子さんやデザイナーの方にお願いして新柄を工夫しています。

芹沢先生のうちわ模様は、作品集としての「うちわ絵集」が出版されているほど広く好まれ、柄も多岐にわたりました。いま先生の柄をおとどけすることはできませんが、なるだけそれに近い作をと心掛けております。

うちわの加工は房州館山で、近在で採れる大明竹（篠竹の一種）を用い、丸柄が特色です。京うちわの差し柄や丸亀の平柄とちがって腰がつよく、江戸うちわとして知られました。

## あとがき

初春の桜の頃、知人と目白にある自由学園明日館を訪れた。有名な建築家フランク・ロイド・ライトの設計で、直線と斜線と回廊による構成が実に美しく、国の重要文化財に指定されたのも当然のことであった。

だが明日館の価値は、その建物のみにあるのではない。学園の創立者羽仁吉一、もと子夫妻の教育理念―勉学と生活と思想の統一の実践、学園でのすべての生活が、生徒たちの自発的な働きによって支えられるということ、社会との連帯感の育成など―その原点を知る上で、実に適切な展示と解説があることも記しておきたい。(S)

発行 株式会社たくみ

東京都中央区銀座八―四―二

発行責任者 志賀直邦

電話 〇三―三五七―二〇一七

FAX 〇三―三五七―二一六九

振替 〇〇―一〇―二一三五六五九

定価 六〇円(税込)